

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 27 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520179

研究課題名(和文) 絵画の中に現れた顕在的属性を作品解説と鑑賞教育に生かす

研究課題名(英文) Utilizing the manifested features of art works to the commentary of art and appreciation education.

研究代表者

吉村 浩一 (YOSHIMURA, Hirokazu)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：70135490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：芸術作品の表に現れた属性を作品解説や鑑賞教育に有効に生かすために、理論的検討と展示の専門家へのインタビュー調査を行った。理論的考察においては、すべての鑑賞者にとって共通の出発点として表に現れた属性を活用することの意義を明らかにするとともに、それを作品のうちに秘められた潜在的属性と区別することの難しさも示された。専門家へのインタビューにおいては、展示作品に対して解説を加えることに対し、美術館学芸員は科学系博物館関係者とはかなり異なるスタンスをとっていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：I wrote an article of the theoretical consideration and conducted interviews to the experts of museum concerning the display commentary, in order to utilize the manifested features of art works to the art commentaries and the appreciation education. In theoretical consideration, while I clarified the significance to utilize the manifested features as the start point of art viewing for all visitors, I pointed out the difficulty of distinguishing the manifested features from the potential features that are hidden in the work. In the interview study, I showed that the curators of art museums have opinions considerably different from people standing in the science museum side.

研究分野：展示学

キーワード：展示解説 美術館 鑑賞教育

### 1. 研究開始当初の背景

美術館や博物館での展示物(作品)に解説文が付いていることは、見学する来館者にとってはごく当然のことと思える。しかし、科学系博物館では「これでもか」と思えるほどふんだんに解説があるのに対し、美術館の展示作品には、作品名と作者名、画材や制作年がキャプションとして示されている以外は、何の解説も付いていないことが珍しくない。美術館学芸員の中には、「美術作品のまわりには何もありません。美術館に行くのは、解説を読むためではないのです。美術は作品そのものが語り部です」(マックリー、2003に紹介されている意見)との極論を主張する人さえいる。美術館関係者は、作品解説に対してかなり消極的なのである。

しかし近年は、音声ガイドやウェブ・ミュージアムの急速な広がりにより、美術館でも作品に対して解説が必要となる機会が増えている。これまでのように、「解説はない方がよい」とのスタンスを取り続けることはできないのである。かと言って、過剰な解説をしている科学系博物館の後追いをするような解説姿勢も許されない。美術館での展示解説はどのような形が望ましいのか。学問的根拠に基づいて考えていくべきである。

### 2. 研究の目的

美術作品の鑑賞をめぐって、Marković & Radonjić (2008) は、作品がもつ属性を「顕現的属性」と「潜在的属性」に分ける必要性を主張した。Marković & Radonjić によれば、両者は密接に関連するものではあるが、それぞれ絵画の構成的領域と表象的領域という別の面を担う。顕在的属性は物理的性質であり、シーンの中にある形・色・大きさ・位置・方向など、目で見ることのできる客観的性質、他方の潜在的属性は、知覚者自身がシーンの中に投入する主観的性質である。感情的・情動的な属性(あるものの方が他のものより楽しそうに見えたり、興味深く感じたりする)や、客観的には同じように静止していても水平線より斜め線の方が躍動的に感じられるなどの疑似物理的性質も後者に該当する。

本研究者が提案したことは、美術館における作品解説は、解説文の制作者が顕現的属性と潜在的属性の違いをしっかりと認識し、両者の区別を踏まえた解説を行うべきであるということである。この提案を前進させるには、まず現状の解説文がどの程度、両者を区別して作られているかを評価することから始めなければならない。その上で両者を区別した解説文を作るにはどのような心がけが必要かを明らかにしていきたい。

### 3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、2つの面から検討を行った。1つ目は理論的検討と考察で、Marković & Radonjić (2008) の2分類の的確な位置づけを行い、その分類に基づく評価

がどの程度可能かの実測を、実際に使用されている作品解説文を用いて行った。それを踏まえて、望ましい解説文作成を実現する方法を検討した。Marković & Radonjić (2008) がリストアップした25の顕現的属性を日本語訳したものを以下に示す。

---

正確 - 不正確  
 整然とした - 乱雑な  
 明確な形 - 不明確な形  
 鮮明 - ぼやけた  
 安定した構成 - 安定しない構成  
 均斉のとれた - 均斉のない  
 刷毛使いの力強い - 刷毛使いのやさしい  
 強い輪郭線 - 弱い輪郭線  
 対比色的 - グラデーション色の  
 明るさ対比的 - 漸進的  
 ビビッドカラー - パステルカラー  
 量感のある - 平坦な表面  
 奥行き感あり - 奥行き感なし  
 丸い輪郭 - 尖った輪郭  
 多色使い - 単色  
 飾り立てた - 簡素な  
 描き込んだ - 薄まった  
 幾何学図形的 - 幾何学図形的でない  
 対称的配置 - 非対称的配置  
 主要な図形がある - 分散的構成  
 直線的 - くねくねした  
 明るい - 暗い  
 暖色 - 寒色  
 滑らかなきめ - 粗いきめ  
 写實的 - 抽象的

---

もう1つは、美術館学芸員をはじめ、展示解説に関わる専門家へのインタビューを実施し、展示解説に取り組む姿勢の現状と問題点、さらには将来像に対する提案を広く収集し、多方向からの意見として地図化して、美術館学芸員の考え方や科学系博物館関係者側から寄せられている期待との隔たりの有無とその内容を明確化する。それを踏まえて、美術館と科学系博物館とが弱点を相互に補い合える建設的意見を列挙する。インタビュー対象としたのは14名で、その属性は以下のとおりである。匿名性を前提にインタビューを行ったため、これ以上具体的に記すことはしない。

---

美術館関係者  
 公立ファインアート美術館統括者(山陽)  
 公立ファインアート美術館学芸員(山陽)  
 公立美術館学芸員(東京)  
 公立美術館学芸員(東京)  
 美術作品の展示解説設計研究者(山陽)  
 公立中学校の美術科教諭(関東)  
 科学系博物館関係者  
 科学館統括者(東京)  
 文学作家博物館統括者(東京)  
 公立科学系博物館学芸員(九州)  
 公立科学系博物館学芸員(九州)

科学館コミュニケーター養成担当者（中部）  
公立科学系博物館研究員（東京）  
両方にまたがる専門職  
博物館・美術館の音声ガイド制作会社責任者  
（東京）  
博物館・美術館のディスプレイ設計会社責任者  
（東京）

#### 4. 研究成果

##### (1) 実際の解説文を利用した理論的検討

顕在的属性と潜在的属性のあいだには、広く“感性”が介在する。そして、その境界が明瞭でないため、実際の解説文では、どこまでが顕在的属性でどこからが潜在的属性なのか、明確に線を引くことが難しい。しかし、難しいながらも、解説文作成に当たり、個々の記述がどちらの属性に軸足を置いたものかを自覚することは必要かつ有益である。

学生 77 名の協力を得て、実際に用いられていた 2 つの作品解説文を表現要素に分割し、それぞれの部分が「顕在的属性」「潜在的属性」それに「背景情報」のうち、どれに該当するかの評価を求めた（「背景情報」とは、作者やその作品が作られた時代に関するさまざまな事実情報のこと）。学生には、分割部分ごとに 3 分類する作業を行ってもらった。その結果、90% 以上の高い一致率を得られた箇所と、その基準よりかなり低い一致率しか得られなかった記述とに分かれた。調査に用いた作品解説文とそれに対する一致度データの例を以下に示す（数字は人数）。

##### アメデオ・モディリアーニの《若い農夫》解説文

「この絵は第一次世界大戦のさなか、モディリアーニが戦火を逃れてパリから南フランスに移っていたときに描かれた」

（顕在）1 （潜在）0 （背景）75

「農夫の身なり、」

（顕在）70 （潜在）4 （背景）3

「濃い茶色に塗られた背景が、」

（顕在）75 （潜在）2 （背景）0

「彼の絵には珍しい」

（顕在）2 （潜在）8 （背景）67

「土の香りを感じさせるとともに、」

（顕在）1 （潜在）75 （背景）1

「彼が影響を受けたセザンヌの、」

（顕在）0 （潜在）0 （背景）77

「とりわけカード遊び連作を想起させる。」

（顕在）0 （潜在）65 （背景）12

「また、無表情で」

（顕在）56 （潜在）20 （背景）0

「黒目のない顔は、」

（顕在）77 （潜在）0 （背景）0

「アフリカの彫刻と仮面への彼の興味を語っている。」

（顕在）0 （潜在）29 （背景）48

「人物の胴体には不思議なヴォリューム感があるが、」

（顕在）42 （潜在）35 （背景）0

「それは簡潔な曲線の組み合わせのみで表現されている。」

（顕在）71 （潜在）6 （背景）0

「これは彼が一時、彫刻家志望だったことを」

（顕在）0 （潜在）1 （背景）76

「思い出させる。」

（顕在）0 （潜在）68 （背景）7

「無表情」という表現は、必ずしも作品に現れている顕在的属性ではなく、解説者の感性が受けとめた主観だと捉える鑑賞者が少なくなかった。このように、「顕在的属性」と「潜在的属性」の区別が曖昧な表現が少なくない。また、「潜在的属性」と「背景情報」との区別が曖昧な場合があることも「アフリカの彫刻と仮面への彼の興味を語っている」という記述に対する意見分布から指摘できる。“望ましい美術作品解説”を実現するには、こうした曖昧な表現が少なくなることを目指すべきである。この研究の詳細については、吉村（2012）を参照してほしい。

##### (2) 展示解説の専門家へのインタビュー

14 名に対して行ったインタビューは、それぞれ 1 時間以上のもので、録音した記録を書き起こし、質的データ分析用のソフトウェアを使って、意見分布全体を俯瞰できるように図式化し、408 個（セグメント）の意見としまとめた。それらは以下の 12 のタイトルに分類された（テーマ名の後の数値はセグメント数）。

1	美術館・博物館の概念	13
2	展示物と展示空間の制作	38
3	企画展と常設展	9
4	学芸員やコミュニケーター	30
5	来館者の見学態度と満足感	38
6	感性	11
7	音声ガイドなどの解説装置	53
8	解説方法	37
9	解説姿勢	90
10	解説文とその属性	32
11	鑑賞教育	45
12	現代アート	12

紙幅の都合で全容は吉村・関口（2015 印刷中）に委ね、ここでは、テーマ 1 から 6 までの特筆すべき点を列挙しておきたい。（括弧内数字はテーマ番号とサブテーマ番号）

a. 「美術界では作者より評論家が偉い」「学芸員には権威がある」「ミュージアムショップでの本物販売はしない倫理規程」等、美術館に固有の文化がある（1.2）。

b. パソコンの機能向上でキャプションやパネルづくりは外注しなくても館側で出来るようになった（2.1.2）

c. 展示物にラベルを付けないという展示業

者からの提案が博物館でうまくいくか (2.2.1)

d. 造形物として具体物を作ると本質的でない部分にも資料的裏付けが必要になる (2.2.3)

e. 日本人は展示物がレプリカだと知るとがっかりする (2.2.4)

f. 美術館では大きな展示物のキャプションをどこに置くかに細心の注意を払う (2.3.1)

g. 観覧順路はむしろ美術館の方に必要 (2.3.2)

h. 新聞社やマスコミが主催する大規模な特別展と学芸員が中心となる小規模企画展の2パターンある (3.3)

i. 美術館では企画や運営は主担当となる学芸員に多くの部分が任せられ、他の学芸員が担当の企画には口出ししにくい雰囲気強い (4.1)

j. 美術館学芸員にとっては展示が研究業績になる (4.1)

k. 展示を企画することや図録での解説が美術館学芸員にとっては重要な業績となるため、個性を表現する解説は図録で行うことが多い (4.1)

l. ギャラリートークは美術館では学芸員が担当するが、トークであるよりコミュニケーションでありたい (4.2)

m. 科学コミュニケーターは伝える能力より相手の尋ねていることを理解する能力が重要 (3.4.3)

n. 館内係員は来館者に生じた問題の最初で最良の情報提供者だが、解説的役割まで持たせてはいけぬ (4.4)

o. 子どもたちに焦点を当てた解説は、大人向け解説としても理解の基本を提供できる (5.1.2)

p. 美術館でもあえて「おしゃべりタイム」を設けて、作品をめぐる会話を促す動きも生まれている (5.1.3)

q. 旅が計画段階から楽しいのと同じで、不便な美術館が観光の一環として組み込まれていることもある (5.3.2)

r. 美術館で子どもがいやがられていたのは、地方公立美術館では過去のことになっている (5.4.3)

s. 中学校の美術部の生徒に美術館と博物館のどちらの解説がおもしろいかを尋ねると、作品を見るには美術館だけ解説は博物館の方が断然おもしろいと言う。「ヘー」と思えることが博物館解説には多いが、美術館解説は何が書いてあるのか理解しづらいからとの理由 (5.4.4)

t. 科学系博物館が重視する知的好奇心にも不思議に思ったり驚いたりする感性がまず必要 (6.2)

など、前半だけからも美術館と(科学系)博物館が互いに刺激し合えるヒントがいくつも得られた。

美術館では学芸員をキュレーターと呼ぶ

習慣が広がっているが、特定の作家や美術史上の時代の権威としての顔をもつ美術館学芸員には「研究者」という意味をもつキュレーターという呼び名がふさわしい。美術館キュレーターの場合は研究業績と位置づけられがちである。他方、博物館学芸員は展示を業務と見なしている。研究者の観点からの解説は必ずしもわかりやすいものでないことがあり、したがって美術館での作品解説において来館者が求める解説を実現するには、キュレーターである研究職以外の職種の方がふさわしいのかもしれない。

このことを含め、美術館側だけでなく、科学系博物館側においても今後の展示解説に向けて改善していくべきことが数多くある。それらのうちかなりのものが、今回のインタビューによりいぶり出された。中には、矛盾し合う見解や実現困難な指摘、必ずしも客観的事実ではない見解も含まれているが、それぞれの意見をもっている専門家がいたことは紛れのない事実である。指摘されている見解を吟味し、必要に応じて取り入れていくことが有益である。それぞれの館の個性を考慮しつつ、本研究で得られた図式を手がかりに、美術館・科学系博物館がともに考え改善していく努力を重ねることを願いたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

吉村浩一、関口洋美 美術館と博物館の展示解説が相互に学ぶこと 展示専門家へのインタビューに基づく展望 法政大学文学部紀要、査読無、70巻、2015(掲載確定)

吉村浩一 映画やアニメーションに動きを見る仕組み 法政大学文学部紀要、査読無、69巻、2014、87-105

吉村浩一 第二次世界大戦以前の我が国の心理学実験機器に対する山越工作所の貢献 法政大学文学部紀要、査読無、68巻、2014、99-115

吉村浩一 カタログに載らなかった竹井機器製作所・竹井機器工業の心理学実験機器を通して記憶学習実験の起源を探る 心理学史・心理学論、査読有、14/15号、2013、57-69

吉村浩一、関口洋美 UXデザインから捉えた美術館の展示解説(2) 実証実験と理論的考察 法政大学文学部紀要、査読無、67巻、2013、39-56

吉村浩一、関口洋美 UXデザインから捉えた美術館の展示解説(1) 問題提起と研究計画の設定 法政大学文学部紀要、査読無、66巻、2013、63-77

吉村浩一 絵画に顕在するものを展示解説に生かす意義、展示学、査読有、50巻、2012、42-51

〔学会発表〕(計4件)

吉村浩一、関口洋美 美術館と科学系博物館の展示解説が相互に学ぶこと 日本展示学会、2015年6月21日(発表確定) 國學院大學(東京都渋谷区)

吉村浩一、関口洋美、東健一 鑑賞教育における認知心理学 日本教育心理学会(招待講演)、2013年8月18日、法政大学(東京都千代田区)

吉村浩一、関口洋美 御茶会での茶碗鑑賞表現に表れた茶碗の顕在的属性 日本展示学会 2013年6月15日 兵庫県立人と自然の博物館(兵庫県三田市)

吉村浩一 展示解説に対する美術館と博物館の意識差 日本展示学会、2012年6月23日 東京学芸大学(東京都小金井市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

吉村浩一ホームページ

<http://www.i.hosei.ac.jp/~yosimura/main.html>

実験心理学ミュージアム

<http://mep.i.hosei.ac.jp/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

法政大学・文学部・教授

吉村 浩一(YOSHIMURA, Hirokazu)

研究者番号：70135490

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

関口 洋美(SEKIGUCHI, Hiromi)

大分県立芸術文化短期大学・情報コミュニケーション学科・准教授

研究者番号：70435379

永田 道弘(NAGATA, Michihiro)

大分県立芸術文化短期大学・国際総合学科・准教授

研究者番号：50513743